様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２４１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０９３９

研究課題名（和文）投影描画法を用いた認知変容プロセスに対する介入モデルとその効果に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the intervention model for cognitive modification process with the projection drawing technique.

研究代表者
田中　勝博（Tanaka, Masahiro）

目白大学・人間学部・教授

研究者番号：９０３３７６３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、描画療法におけるPDIについて検討することが目的である。半構造化されたPDIを用いたかかわりについて、面接体験や情緒体験、体験過程について調査を行う。
　無作為に抽出された30名を対象に調査を行った。その結果、PDIによる面接評価や情緒体験に有意な交互作用はなかった。一方、描画前後で、否定的感情の低下と平静さの向上があった。最後に、描画プログラムの描画面接の効果や体験過程を調べた。体験過程が深まり、自己探索的になるものが5名（63%）、情緒的な自己探索に至らないものが3名(38%)みられた。特にPDIでの話題が広がらず、Thのフィードバックが乏しい場合に、低い体験過程にとどまっていた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the effects of the PDI (post drawing interview) for clients' emotional experiences and experiencing process in drawing therapy.
The drawing therapy with semi-structured PDI was conducted to randomized 30 people. Results, there was no significant difference in the interview experience and affects. However, after a drawing session, it was descended the negative affection, and the improved calm affection. Finally, we examined the experience process of the 8 participants in drawing sessions as clinical settings. A result, five participants(63%) had deeper experience process. If therapists' feedback was poor, experience the process was low. Then, in a follow-up interview after drawing experience, 50% of participants reported an opportunity to look back on themselfs. In addition, 2 people reported self-image was clearly through the drawing, 4 people reported that re-recognize their self-image in the relationship with the therapist.

研究分野：臨床心理学

キーワード：臨床心理学　描画療法　描画後質問　PDI　体験過程　描画プログラム

１．研究開始当初の背景

投影描画法とは、描画を媒介とした臨床心理査定および心理療法の総称である。代表的なものとしては樹木画や風景構成法などがあり、表現をすることそれ自体だけでなく、表現された描画を媒介としてクライエントの気づきや心理的変容を促進するものである。主に、クライエントの自己表現を補助することを目的として使われることが多い。また、絵を描くこと自体がカタルシスを生むなど、間接的に心理的な問題を取り扱うことを可能にする技法のひとつである。

これまで、当研究グループは、①新しい投影描画法の開発、②描画を用いたナラティヴ（物語）技法、③描画後質問(Post Drawing Interview；以後 PDI と略記)を用いた関与法の研究を行ってきた。その結果、投影描画法は、カタルシス効果だけでなく、描画を通したナラティヴ（物語）の構成が自己理解の促進や認知変容プロセスを生じさせ、クライエントの認知的変容に対し戦略的に利用可能なのではないかという仮説にたどりついた。

このような描画を用いた介入による治療的変化は、治療者とクライエントとの信頼関係を基盤として生じてくるものであり、本仮説を検討するためには、個別面接形式に則った調査が必要不可欠である。

描画療法は描くだけではなく、描いた絵がどのように面接の中で取り扱われ、どのようにフィードバックされたかによって、クライエントの体験するものは大きく異なる。特にセラピストとクライエントとの間で取り交わされた非言語的なコミュニケーションは、クライエントの描画体験に大きく関与していると考えられる。そこで、PDI によって半構造化された描画面接を通じて、描画療法におけるフィードバックについて検討する事が必要であるが、描画療法のフィードバックとそれによる描画体験の変化に焦点を当てた研究は本邦では少ないのが現状である。

また、本邦での描画療法研究では、「バウムテスト」や「風景構成法」の研究といった、個別的技法の研究が行われることが多いきらいがある。しかし実際の描画療法では、複数の技法を臨機応変に組み合わせて用いることが多い。つまり描画技法をプログラムパッケージ的に用いる。特定の技法と言うよりも、この技法群からクライエントの持つテーマが浮き彫りにされるものである。そのため、特定の技法を中心にするのではなく、一定のテーマに沿って、描画技法を組み合わせたプログラム用いたかかわりについて検討することで、実際の臨床に根差した研究が求められていると考える。

２．研究の目的

そこで本研究は、これまでのわれわれの知見に基づき、より効果的な投影描画法の使用法を検討するため、PDI を用いた投影描画法の構造的介入モデルの構築とその効果を検討する。本研究の目的は大きく二つあり、第一にそのような関係の構築と変容効果を促進する要素についての検討、第二に、描画物語化技法として、今と将来法、および橋画をもちいて、半構造化された描画および PDI が心理的変容に及ぼす影響について検討することである。

調査にあたって、まず、同意の得られた健常群および臨床群に対し、卵画（後述）描画に対する PDI(田中ら,2012)を用いた言語的介入を独立変数とした研究を行う。そして、面接の記録から、セラピスト－クライエント関係の質の評価や、描画に対するフィードバックの内容と反応について事例的に検討することで、描画法のフィードバック方法について研究を重ねる。まずは描画療法における半構造的描画後質問(PDI）の効果についての研究を行う。

これらを踏まえた上で、実際の臨床場面に即して、複数の投影描画技法を用い、その中で生じる体験過程や気づき体験とそれに伴う行動変容(self-regulation)プロセスについて検討することで、構造的 PDI を用いた描画療法の効果について検討するものである。

３．研究の方法

(1) 半構造物語化 PDI を用いた描画介入の効果の検討

応募のあった 52 名から 30 名を無作為に抽出し、物語 PDI あり、なし、待機(統制群)の 3 群に無作為に 10 名ずつ割当て面接を行った(全 5 回)。初回面接時に調査参加の同意を得、面接テーマとして「今悩んでいること」について内容と程度の評価を尋ね、5 セッションの描画療法（卵画）を実施した。面接終了時に描画体験尺度（土田・田中,2012）および Visual analog scale(以下 VAS)で体験を評定した。調査は大学院生 4 名、臨床心理士 2 名で行った。

(2)物語 PDI が情緒体験に及ぼす影響平成 26 年度

昨年度の結果を受け、調査方法を見直し、31 名の大学生・大学院生を対象に物語 PDI 実施群 14 名、非実施群 17 名にランダムに振り分けた。それぞれに橋画を実施し、インタビューを行った。インタビューの際、物語 PDI 実施群には半構造化物語 PDI に基づいてインタビューを行い、実施しない群においては自由に感想を求めた。面接の前後に一般感情状態尺度(小池ら 2000)を実施し、描画後の体験について、下表の項目の Visual Analog Scale による評価を求めた。

(3)体験過程に PDI の果たす役割について

(1)、(2)での調査結果を受け、より一般的な臨床場面を模した中での PDI の意義について検討するため、構造的な課題画を中心にとしたプログラムを組み、実施中、および実施後の、半構造化された PDI、フィードバックといった要素について調べ、より臨床状況に即した形で、PDI を用いた描画体験が気付き体験へと及ぼす影響について検討を行う。描画プログラムを実施し、一般的な臨床における投影描画法と同様の場面設定を行い、調査に用いた描画プログラムは下表の通りである。

表１　描画プログラム

	目　　的	技法
1 回	自己概念と展望の把握	今と将来法
2 回	無意識イメージの視覚化による気分と外的世界の認知	卵画・洞窟画
3 回	自分の課題とリソースの確認と気づき	6 画面構成法
4 回	展望についての査定、1 回目と対比したアウトカム評定	橋画

まず、初回面接で研究の最終的な説明をする。「描画を使って、自分を振り返ることで、自己理解を深める」ために行う面接であると枠づけ、協力者の個人的背景を聴取し、それに基づいた理解の上で、信頼性の確立に努めながら、描画面接を実施した。上図に則り、各回描画と構造的 PDI による面接を行った。描画体験の評価はクライエント体験(福島ら)、および描画体験尺度(土田ら)をもちい、Rosenbaum et al(1990)による面接後のフォローアップインタビューを行い、協力者の自己イメージ（自尊感情）や、描画者の体験過程の変化を、E.T.ジェンドリンの体験過程理論にもとづく、M.クラインらが開発した体験過程スケールをもちいて評価を行う。対象者は大学生 8 名であった。描画と PDI 後のプロセスについて検討した。

４．研究成果

(1)半構造物語化 PDI を用いた描画介入の効果

PDI を半構造化し、PDI によって描画ナラティヴの物語化を促進する介入を行い、当初の問題の課題認知と面接体験の変化について検討した。

①課題認知の変化　調査期間前後の悩みの強さは、物語 PDI＞なし＞待機の順で課題の解決傾向がみられたが、有意差はなかった。

②感情状態の変化　面接前後で否定的感情の低下、肯定的感情の上昇が見られた。描画を行い、物語ることで感情状態が落ち着く傾向がみられたが、物語 PDI の有無による違いは見られなかった。

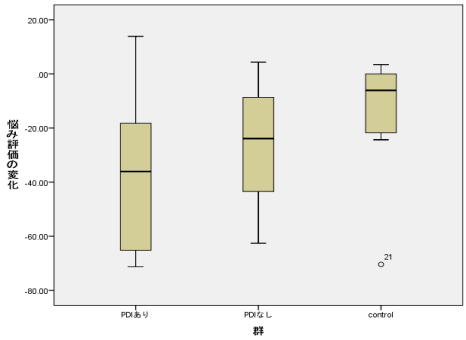

図１　介入前後の悩み評定の改善度

③面接体験の評価　物語 PDI の有無による面接体験評価に差はなかった。

④事例検討　描画を事例的に検討すると、自由語り群と比較して、PDI 群において、研究協力者の抱える課題が繰り返し表現され安くなる傾向があった。また PDI を通じて描画内容が詳述され、物語が広がっていくものが多く見られた。とくにある絵で描かれた描画主題が別の関連する描画主題を呼び起こし、語りの内容が深まるプロセスがみられた。

以上のことから、半構造的物語 PDI は意識的な情緒変化や発見的体験が自由語りと比較して有意に増加するとは言えず、自由語りと同等の体験をもたらす事がうかがわれた。

一方、半構造的物語化 PDI は、自由語りと比較して、描画について詳述することを助け、描画内容について、セラピストと描画者が共有しやすく効果ある。描画者自身にとっても描画を構成的に捉える補助線になるようだ。

(2)物語 PDI が情緒体験に及ぼす影響

物語 PDI が描画後の情緒体験に及ぼす効果について、30 名を対象に一般感情尺度および描画体験尺度を用いて検討を行った。

結果、描画前後での気分感情については、ネガティブ感情(NA)が有意に低下し、平静さ(CA)は有意に向上したことが確認された。しかし PDI の実施による交互作用はみられなかった。

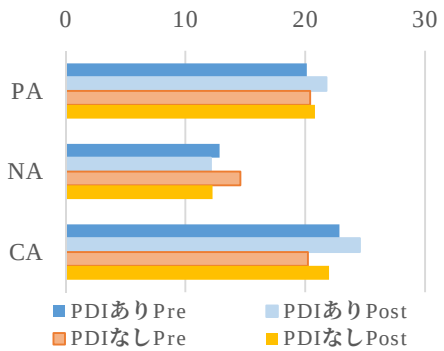

図2　感情状態の変化

また、描画後体験について VAS 尺度にて評価を求めた。各尺度の平均は、いずれでの群でも肯定的な描画体験があった。しかし、t 検定を行った結果、PDI の有無による有意な

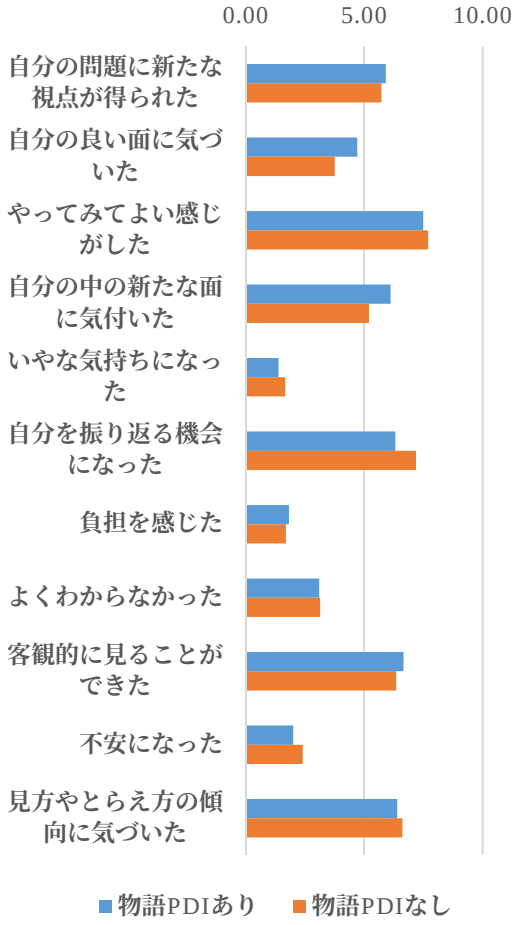

図3　描画体験VASの平均値

違いはなかった。

これらの結果から、描画体験や感情体験について PDI の形式による違いはないといえるようである。ただ、描画の前後でネガティブ感情や平静さは有意に低下したことから、描画実施することで、クライエントが気持ちを落ち着かせ、自己を振り替えりやすくなる可能性がある事が示唆された。つまり描画介したかかわりによってカタルシス効果は見られたものの、物語化し、描画イメージを膨らませることは、意識的な情緒体験に及ぼす影響についても自由語りと同等程度であった。(1)(2)の研究から、PDI を行うことでの、意識的なアウトカムはあまり見られないことが示唆されたといえる。

(3)描画プログラムによる体験過程の検討

最後に、PDI の無意識的体験作用について検証した。検討に当たっては、描画プログラムを構成し、プログラムを通じた体験過程について評価を行った。まずクライエント体験の推移は下図の通りである。おおむね、よい関係にあった関係が、大きな変化をすることなく維持される傾向にあった。ただし、3 回目(6 場面構成法)のみ関係性や効果性が低下する傾向にあった。

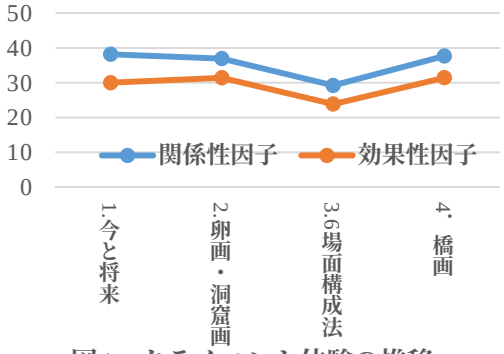

図4　クライエント体験の推移

ついで、　描画体験の推移をまとめたものが下図である。描画の発見体験やカタルシスは維持される傾向にあるが、技法によって直面体験の度合いに差があるようである。直面・否定的な描画体験の推移を検討すると、大きな変化は認められない。むしろ、面接初期の緊張が緩和され、その状態がほぼ維持される傾向にあることがわかる。

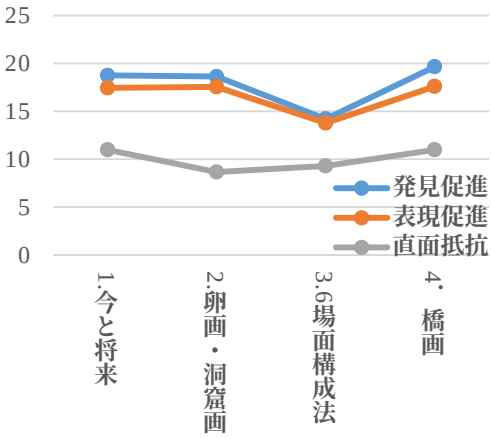

図5　描画体験の推移

特に描画体験は 6 場面構成法の回において、肯定的な体験が低下する傾向にあった。一方で描画者が最も印象に残った描画として、6 場面構成法があげられることが多かったこととそぐわない。この描画で描かれた主なテーマは「自分が何かに追われている」、「早く独立したいと願っているが不安」といった青年期的な状況であることが多く。描画者は自己の置かれている状況が表現されていると感じていた。そのために描画者の印象に残りやすいものであったが、この点は本質問紙だけでは読み取れないものと考えられる。

そこで、体験過程の推移に着目すると、最終的に自己探索的に至るものと (5/8 名)、情緒的な自己探索に至らないもの(3/8 名)がおり、6 場面構成法の回が分岐点となっているようであった。この回についてさらに検討を加えたところ、PDI での話題が広がらず、Th のフィードバックが乏しい場合に、低い体験過程にとどまる傾向が観察された。

また、描画体験後のフォローアップ面接では、自己を振り返る機会が増えたと感じてい

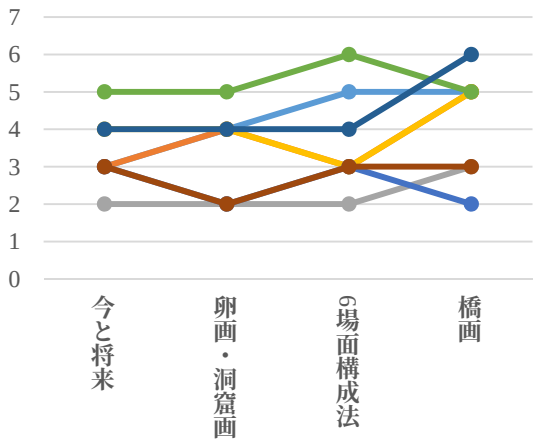

図6　体験過程の推移

る者が全体の半数おり、自分が何となく感じていたことが再認識できたと感じたものが 2 名、セラピストとのかかわりの中で自己イメージを再認識したと感じたものが 4 名見られた。

この点から、描画について構造的に語るだけでなく、セラピストのかかわりもまた重要であり、PDI をもとにいかに応答していくかが、描画療法の体験過程を左右することが明らかになった。特に PDI によって語られた内容をサマライズしナラティブストーリーをセラピストが言語化することで、クライエントの自己理解は深まることがうかがわれた。

結論

描画療法における構造化された PDI を用いることの意義について検討した。その結果、構造化された PDI の有無ではなく、描画を介して人がかかわることが、クライアントの感情状態を穏やかにし、否定的感情を軽減することがうかがわれた。それは必ずしも PDI で自己表現を促進することで生じてくる効果とは言えず、実施者のかかわりが、個人の面接体験や体験過程に影響することがわかった。絵を描くだけではなく、描いた絵がどのように面接の中で取り扱われるかで、クライエントの描画体験は大きく異なり、特にセラピストとクライエントとの間で取り交わされる言語的かつ非言語的なコミュニケーションは、クライエントの描画体験に大きく関与していた。

たとえば、卵画のような簡略な自己投影技法においても、回を重ねることで、その人の課題が浮かび上がってくるものであった。ただ、多くの協力者は描画のみで気づきに至ることは少なく、構造化された PDI による語りもまた気付きを深める要因となりえるとは言えなかった。反面、構造化された質問を用いたかかわりによって、セラピストがクライエントに対する理解を深め、効果的なフィードバックにつながることで、描画者が「今」自分が「何の課題を描いているのか」を感じ、時には探索的に検討することを促進する可能性があることが考えられた。

引用文献

■ 田中勝博、土田恭史、今野裕之、丹明彦、赤坂澄香、卵画と洞窟画における描画後質問（PDI）の作成に関する研究、 目白大学心理学研究、8、2012、pp.1-14
■ 土田恭史、田中勝博、今野裕之、丹明彦、赤坂澄香、描画体験の評価に関する尺度の作成の試み、目白大学心理学研究、8、2012、pp.23-33

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 田中 勝博、土田 恭史、野沢 美紗、菅谷 正史、橋画（Bridge Drawing）の描画特徴とその評価に関する研究、日本芸術療法学会誌、査読あり、印刷中
② 土田 恭史、田中 勝博、今野 裕之、菅谷 正史、「今と将来」法による描画後体験や気分感情へ及ぼす影響に関する研究、目白大学心理学研究、査読あり、11 巻、2015、pp.29-39
③ 藤田 彩恵子、田中 勝博、「今と将来」法の心理臨床場面への応用のための探索的研究、臨床描画研究、29 巻、2013、pp.84-103

〔学会発表〕（計 4 件）

① 田中 勝博、土田 恭史、菅谷 正史、野沢 美紗、橋画（Bridge Drawing）の描画表現の特徴に関する研究、第 46 回芸術療法学会　2014.11.29~30、名古屋大学(愛知県名古屋市)
② 土田 恭史、菅谷 正史、田中 勝博、卵画を用いた物語構成的 PDI による介入効果の研究、第 46 回芸術療法学会、2014.11.29~30、名古屋大学(愛知県名古屋市)
③ 鈴木 裕子、田中 勝博、6 場面構成法における描画反応や反応パターン、 第 45 回日本芸術療法学会、2013.11.30、金沢医科大学（石川県河北郡）
④ 田中 勝博、土田 恭史、菅谷 正史、橋画における描画内容とその評価に関する研究、日本描画テスト・描画療法学会 23 回大会、2013.9.15、奈良県新公会堂(奈良県奈良市)

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　勝博　（TANAKA, Masahiro）
目白大学・人間学部・教授
研究者番号：９０３３７６３４

(2)研究分担者

土田　恭史（TSUCHIDA, Takashi）
目白大学・心理カウンセリングセンター・非常勤相談員
研究者番号：３０４５８５５９

(3)連携研究者
丹　明彦（TAN, Akihiko）
目白大学・人間学部・准教授
研究者番号：８０３４８３１７

今野　裕之（KONNO, Hiroyuki）
目白大学・人間学部・教授
研究者番号：７０３４８３１６

菅谷　正史（SUGAYA, Tadashi）
目白大学・心理カウンセリングセンター・助教
研究者番号：３０５８１５３２

青柳　宏亮（AOYAGI, Kousuke）
目白大学・人間学部・助教
研究者番号：４０７０８５１７
（平成 27 年度より連携研究者）

藤里紘子（FUJISATO, Hiroko）
目白大学・人間学部・助教
研究者番号：５０６１０３３３

鈴木澄香（SUZUKI, Sumika）
有明教育芸術短期大学・子ども教育学科・助教
研究者番号：６０５６７３５３